香川不抱作品集

○
積藁の下に泣きにし草の芽は
日にしも逢ひぬあやまちなせ
そ

○
永き日や熟睡にさそふ風多し
海棠の花連翹の花

○
竈のけぶりうづまく檐下の壁
のくづれにたんぽゝの咲く

○
かたはらに喘く声きくみづか
らの病めるがゆゑに救いかね
つも

○
はてしなき君が世界のかたは
しを僅に旅しかえりこしかな

○
ありとある星咲きにほふそを
すべて地にあればこそ愛でる
得るなれ

○
落ちし時より音を立ては立て
しかど玉は砕けつしら玉にし
て

○
祝はむか悲しむべきか死にに
行く別れの宴に君を賜ひぬ

○
ああ天は私すなりわかつべき
少女ヲいまだ吾にもてこず

○
悲しみの煉瓦きづくにいささ
かのせめんと要す喜びきたれ

○
悲しみと正札附ける反物を値
切らんとしてあやまちしかな

○
おもふ子を得て死ぬあるは得
ずに死ぬ何れも等し天地は有
り

○
好むべき第一としてたをやめ
を同音に云う疑いも無し

○
土に生き土をあさるに餘念な
し日の行く方の空は忘れぬ

○
君思い病を思い死を思い時は
あまりぬ夜の明くる待つ

○
車過ぎ大馬きたり恋人の行く
を妨ぐ海に行かまし

○
古家よいづらまゐる居ながら
に倒れんとする御体をもて

○
奴らはこの上なほも灰色のに
ぶき眼鏡をかけよとぞ置く

○
地の罪のすべてをさてはかた
はしを償はむとや山ざくら散
る

○
「君の舟航路を取らず何処行
く」「許しなきゆえ暗礁をさ
す」

○
吾ここにありと叫びぬ千よろ
づの中の一つの星としりつゝ

○
なにげなく生ひのびにける若
人の先づ眼に入りぬかほよき
少女

○
かの虹とかの日輪と少女子と
よきものとしてあこがれにけ
り

○
日輪をにくむ心は更になし暑
しとかこち寒しと云えど

○
一瞥もきたらぬ故に吾は泣く
星より日よりわが少女より

○
燦として光るめでたき星を見
て入日の泣くも悲しからずや

○
淋し淋し愈淋し琴のおとくち
づけの音のきこえてくるに

○
日に千度鏡にむかふいささか
のすぐれし点を見出でむがた
め

○
くれなゐの舌の舌を犬は吐く
汝もかわくかわれもかわけり

○
しきりなくむだ矢を放つ見よ
かしこ丘の上なるわこうどの
群れ

○
知られざるにあれど今日も痴
者こびを送りぬ口惜しきかな

○
天外に置かれしことを吾いか
る汝等何のかかわりもなし

○
わが足の遅きにあらず列を出
ず駆けて行くもののあまり多き
に

○
積まれたる眞白き紙を我かぞ
へ思わず悔いず泣かす笑わず

○
より強きものの来るをおそれ
つつ弱きにまじり我をほこり
ぬ

○
我かもてる凡ての時を黒髪を
もつ子のために割かんとおも
ふ

○
右左森の奥より喝采は来りぬ
谷へわが落ちしとき

○
海に行きまた山に行き喜ばぬ
人の喜ぶものをしらずや

○
ともかくも海はおそろしよき
島やよき舟あまた浮べたれど

○
あわれこの光の末は君と呼ぶ
焦点もなくいたづらに散る

○
何となく投げたる珠のこはい
かに空にかかりて帰り来りぬ

○
死なばとぞ思う果たしてそれ
ほどの大事か否かわれは知ら
ねど

○
心して見下しゐしがやがて鹿
片足を置く崖の始めに

○
ただ一度口笛吹きぬ生涯にそ
れも彼の蜂刺すとせしゆえ

○
山のうえ石橋のうえ花の上す
べてあやうし平地にぞ居む

○
ああ心終にかよわしかよわな
るこのししむらに従ひて泣く

○
この石の転ぶ方にぞかく行く
吾あやまつも君かかわらず

○
いささかの市埃にさかしくも
目を掩ひ行く人を好まず

○
わが符牒日の出る方を北と云
い日の入る方を東と定む

○
おもしろし雲は動けば人の形

獣の形にならむとぞする

○
からからと笑ふが如き下駄のおとしきりに続く少女行くらし

○
みづからの統ぶるあたはぬ値なき大き心をもちて生れき

○
黒き石にちきき孔ありのぞけるにおほかた見えつあめつちと君

○
いかばかり力めたりけむ暗きより出でぬ心をひき立てつべく

○
乞食の一つの笛に人多く徒ひて行く吾も吹かまし

○
木によづがづらはしさきにあゝ逢に赤き林檎を身すててかへる

○
このかみを嘆する胸の灰色を琴のやさねにひらかれぬる夜

○
岩道の中の草生をより行かむ五枚かきねのおしき身なれば

○
わが飲のこえきかれこは覆面をとられしおもひ木かげに入らむ

○
また一つさびしさふえぬわが父に靴をあがなう銭なきを知る

○
日輪の悲しき事はふくよかのかの白雲に打たるる事か

○
わがここち始めて汽車に乗り得たる海をば見たるそれも交りぬ

○
たまさかに心出てきてみづからの土偶の顔をいとしやと撫づ

○
大いなる我の心は天地に満ちてあれどもふるるものなし

○
わがどちの車の前は馬ならず昔も今も牛を用いる

○
ああまたもかの黒雲のさへぎりて吾のもてれる森の見えなく

○
この街の少女の心みなすべて聞きけるが如し琴の音ぞする

○
わたすべき文なりしかどああ今日もふところにしてかえり来りぬ

○
少なくも四五年ばかり思はずば与えられざる少女なるかも

○
汲み上げしつる瓶の水をまたもとの泉にうつす事の如けむ

○
わが君の心を外にそらさじと日もすがら吹く笛の苦しさ

○
世の少女皆さかしくも痩せはてし吾を知れば糧を乞はなく

○
軽んじて応ぜざりしけりたをやめはともに玉撰る事も知ら

ねば

○
方便に君を用いる如くにて心
おくれて文書きがたし

○
舟乗の顔をも白くうつすなる
床屋の鏡おもしろきかも

○
そのかみの文のこころをかり
来たり見ればか月のなつかし
きかな

○
三疊のいぶせき室の本棚の前
に吾が寝て夢をのみ見る

○
大なる心の隅の一方は父をも
君をも憎み得たりな

○
なまけてふいと大なる分配を
得たれば最早とるものはなし

○
走り走り走りつかれてたふれ
たる所にありし花吸えるのみ

○
一つづつきざはし踏みて到り
たる頂なれば嬉しくもなし

○
裏街のいとはやらざるきびし
げの床屋に行きて髪を刈る時

○
隣人よ稀にわが戸のくられざ
る日見る時はわれ泣けるなり

○
若死をする兆かも何よりも宗
門の書を好みて読は

○
界隈も此の泣面に厭きたらむ
吾も居づら宿更をせむ

○
図書館の書物の如く少女たち
集むる事は難しくあらむ

○
ふところの賽布の中に子を入
れて銭数へつつ金絲雀を聴く

○
そをききて泣く日かも來む尺
八を憐の男習ひはじめぬ

○
わが恋は薔薇のなかを日もす
がらかけりしに似て傷の少き

○
男のみ集る吾の学枚の寒さに
堪へずなまけそめにき

○
いかがてかの子を得べきああ
何の方使もなし網を張らむか

○
申象を少しは君も受けたらむ
七朝つづけ四辻に遇う

○
さきの日の雨のいたみのなほ
少しのこりてあるに又ふるか
雨

○
日輪の光りをあまた吸へれど
も肥えぬ故あり君を思へる

○
芝居など見しあくる日の寝た
らざる日にはいとこそ人恋し
けれ

○
ああもともたけ低き子は列な
どを作りて行くをもともと好
まず

○
眠らむがためにもかかるいと
つよき酒をもとむる夜頃とな
りめ

○
そのかみを嘆ける胸の灰色を
赤き琴の音きてまぜかえす

○
さきの日の雨のいたみのなほ
少しのこりてあるに又ふるか
雨

○
日輪の光りをあまた吸へれど
も肥えぬ故あり君を思へる

○
芝居など見しあくる日の寝た
らざる日にはいとこそ人恋し
けれ

○
ああもともたけ低き子は列な
どを作りて行くをもともと好
まず

○
眠らむがためにもかかるいと
つよき酒をもとむる夜頃とな
りめ

○
そのかみを嘆ける胸の灰色を
赤き琴の音きてまぜかえす

○
人皆は湯になど行きて足伸す
土曜日なれど吾ひとり泣く

○
人ごみの大通りをば用のある
如くに歩むこのたはれびと

○
或日にはくきれ柱の折れ針を
父のまにまに抜くぞおかしき

○
入日さす豊旗雲もたをやめの
赤きりぽんのはしに及ばず

○
ロゆがめ少しゑみつつ恋人の
ある傍を通りけるかも

○
いとよくは挨拶などもなし得
ざる子の云ふ事を信じ給ふな

○
煙突の如き位遣にもあるなら
ばあるひは君の目につくらむ
か

○
産声をあげたる日より放れざ
るものが又しぬこのあやまち
をと

○
わが父は借家ずまゐとなりて
より子のいふことを怖れぬる
かな

○
四辻に心捨てたりすくなくも
たをやめの手に拾はれむため

○
この歩み少しゆるまば我はあ
あ全く病める人の如けむ

○
若死をすべき路をば取りしの
み衰へぬべく赴きしのみ

○
そのすがた尼によく似て尼よ
りもさらに心の寂しき男

○
我を泣く鴉の声を聞にけり少
女の下駄を路にならすも

○
人生の底か終りか極まりか死
なんとすれば心おちつく

○
貪しかる身なれどちさき下駄
はかず死に瀕すれど祈らざる
かな

○
我の為母はあれども母のため
我は有り得ずまた酒に行く

○
泣かしめしことと使に行かし
めし事とあるのみ死にし妹

○
世の中の薄なさけにもことご
とく涙をもちて答へけるかな

○
天地をくつかへす程とどろき
て針のさきほど光るいなづま

○
力メリアを吸ふ先生を思ひ出
し敷島を置きカメリアを吸ふ

○
我が行けば必ず我を映しけり
かの硝子戸ぞ君にまされる

○
四辻に出合ひてあれど君が目
に我は附かざり空気の如く

○
からかさを高くかかげて仰の
きて歩きてあれど寂しき人ぞ

○
かの君に見すべき折のついな
くくわが美きこころ失せなん
とする

○
何もかも足り余りたるかの君
を誘ひ出すはむつかしきかな

○
わが胸を傷つけずしてこころ
よくかき裂くものは音楽（ミ
ユジック）のみ

○
美しき男にのみは風吹かずわ
れの肩月にも花ちりかかる

○
失いぬあらゆるものゝ慕ひ寄
る暴ひ寄る日なたの如きわれ
の心を

○
燐寸をば十本ばかり取り出し
何か占い出で行きし父

○
われもまた暗き所は手を振り
て男らしくも歩き得るかな

○
猶すこし去年の夏の夏やせの
残りてあるにまた夏の來る

○
山の井の水におちたるくれな
ゐのひと葉の如き悲しみぞ来
る

○
など早もしかは告げごぬさす
らひてわれわびはてつ君に易
かり

○
われをおきて君が心ぞ去りて
行く引く汐のごと何処ともな
く

○
雨ふれば天に星なし何の日ぞ
われ少女見ず九日ばかり

○
さびしげにたけの低きと痩せたるといたくも吾に似たるものかも

○
少くもかかる不幸の始まりほ独り息子と生れしにあり

○
やちまたに正体もなくねて寝てあればほどよき人に助けらる

○
君に間ふ後よりしてわが影は薄くあはれと見ゆる事なきや

○
二万里の大野の中の一寸の石にしばしばつまづきしかな

○
いきいきとにほへる少女ありきとは知らざりしかなこれの老舗に

○
表にもあらはるるかもさぴしげに銭と恋とを求むる影の

○
半日は論語をよめり半日は頬の赤らなる君を息へり

○
荷車のあまた続きて美しき向ひの店の娘見えなく

○
それもまた首枚ばかりかさぬればふくよかによし薄きしら紙

○
七入日ものを思はずひたすらに眠らば癒えむわが病かも

○
もの知らぬゆゑに頭を挙げざるとやや異れり女なき故

○
大空をとりて抛つくはだてにひとしくもあるか忘れむとする

○
赤らひくひとりの少女ある店を見ずして町をゆくは難かり

○
口笛を近く巧みに吹けばとてたやすく来ます君ならざりき

○
隣りより琴なりいでて悲しみに沈まむとせし我ぞたすかる

○
裏町の古道具屋にあるものもわが欲りすれば恋しきものを

○
君われを好まざれども少くもきらふが如きことはなからむ

○
さびしきは赤き袖ふるその君のうしろ姿をのみ見るゆゑぞ

○
だらしなく下駄ひきずりて行くを見よ我の心の失せてある時

○
感惰のみちたらひたるそのあとに知慧なきばかり悲しきはなし

○
一人にて何事も皆するゆゑに我党はかくさびしきならむ

○
このごとき不幸となりぬ泣くたびに必ず乳をはあたへられつつ

○
要するに三十一文字をならぶるはみな我か如き小人ならむ

○
その手をばとどめたぶべし泣き面を打つとも何か張合のあ

らむ

○ 臼ほどの瘤を背中に負ふ人もはづかしとせず出で行くものを

○ ああ古き日輪ありて母ありて此の若き子は死ぬる能はず

○ わが前に羞らふごとくその少女彼れの前をも羞らひて行く

○ この春も平凡なりき美しき涙にねれて泣かざりしかな

○ 弱くして保ちあたはず大空にしばし心をあづけて置かむ

○ 市にゆきばかうつけよと罵られ帰りこし子を父は知らなく

○ 疲れたる目のかたはらの疲れざる耳が今しもヴオロンを聞く

○ 塵あがり人等叫べる本町の雑沓の夜を低能児ゆく

○ 眉毛をば少しつりあげ舌出せば狐の顔に似るが悲しさ

○ しかれども燃ゆるが如きくれなゐの帯したる子はわけてなつかし

○ なみならぬ弾力のあるぜんまいを押へてありぬ我の心は

○ おのが頻の少し痩せたることなどを唯息ふのみ此頃のこと

○ 日向にて尺八を吹きひそかにも倉にかくれて鏡をば見る

○ しかれども我を如何にせん手近なる寒き明日の朝を如何にせん

○ 大空を思ふがままにかけめぐる翼なかりきゆるされしかど

○ 人もまたかくの如くに打まどひこの面白き恋を捨てきや

○ 冬の日は障子にてれどすとおぶは温かなれど喜ばずわれ

○ 大いなる心と変りわけもなく世慣れて行くが口惜しきかな

○ ぬれ髪の君をいつの日厭くべきや三味線の音の中に遊べば

○ 足かへし森へわれ入るわが党のものならざりき酒もをみなも

○ かくばかり女と共に歩けるも我がおぼえたる初めてのこと

○ さぶる子の夜目にやつれし顔よりはその追ひきたる下駄の音よし

○ 大風の吹きたるあとの柴山の如くにあはれ荒みたる歌

○ SCOTCH を著てあることも灰色の帯してあるもあはれなる吾

○ 遠からず崩れて落ちん我家の

檐より洩るるわが琴を聞け

○夕暮の窓にもたれて物思ふ楽しさ捨てて往く処なし

○しかすがに女はせねど男みなふところ手して冬の夜を行く

○泣顔の若き不抱が口笛を吹く時ばかり悲しきは無し

○やうやくに酒と煙草のちまたにぞ出でて来れる迷ひながらも

○薬をぱ飲むが如くに飲みし酒その顔に酵ひ心よろしき

○この如く小く我はかたまりぬ余りに我を守りたるゆゑ

○小きものかよわきものの命なる美くしさをば持たぬ我かな

○かの如き凡才すらも三十の今日まで飽かで歌ひてあるを

○裏町の人の娘をやとひきてさせつる事を今日は我がする

○土間の隅せきたん箱に腰掛けてこの若人は年を送りぬ

○哀めど我は傷らず君により思はれてある心なるゆゑ

○かの少女迷ふことなくわが張れる網のかたへをよけて通りぬ

○この我を助けんとして集れる若人を捨て赤襟に府く

○思はれてわれある如しくどかれてわれある如し琴を弾けは

○秋立ちぬわが少女にもいささかのさぴしさあらん隙間あらんかも

○我は好く男にあきしＨｙｓｔｅｒｉａの女の顔を秋の景色を

○家はまたさぴしくなりぬすさまじく白き心の父帰りきて

○眞夜中に風の如くに帰りきぬ土産もなくて父帰りきぬ

○少くも空気の満たぬごむだまの息はるるかなわが顔を見て

○唇をあしたゆふべに幾度も持て行きたれど鳴らざりし笛

○米搗きぬ京に行くべき足をもて君を訪ふべきわが足をもて

○田舎にてよく見る縞の着物をば君が着てありものたらぬかな

○わが足を土間に頭を板の間のくりやの隅におきて眠りぬ

○父のみが愛しくなりぬこの頃は父のみ老いて行くにかもあらむ

○我は又たをやめを見てうれしげに口をゆがめて笑いたるか

な

○

猶すこし明き時より燈をともしなつかしき夜の来らむを持つ

○

尊徳と云へる翁の心をば聊かなれど持つがかなしき

○

一昨日のわが心には片目なるかの女すら要ありしかな

○

この我を守らむがため傍らに寝ねたる父の高いぴきかな

○

夢を見てかなり疲れしこのからだ君を背負ひて走れ得べきや

○

われ軽しわれたよりなく泣きてあり病上りの如く悲しく

○

彼の君に近よりがたししばらくは三味線の音の中に遊びぬ

○

伊太利亜の少女の如きかの君の眼にとどまるはいかなる男

○

得がたくて天のものともあこがるる彼の君を又四辻に見る

○

あてもなく君と手を取り歩ましし夢より出でてこしものの如

○

いく日ほど君にあはずてあり得るや吾は初めて試みをする

○

君はその美しさをばもつ上に何を求めて迷ひつつある

○

自らの美しさをばかの君が気附かであらばわがためによし

○

彼の君が寄にしむけしその素振胸につかへて心よからず

○

ひねくれし吾の眼のみが彼の君を美しと見初めて見るにかもあらむ

○

彼の君のままにならむとする如き吾の素振を見たまはぬかな

○

それなくもわが恋しさはかはらねどかの君はもつあまき唇

○

此の恋は此の男より頭をばさげて行かずば遂げ得ざる恋

○

わが母に着更を乞ひて出でて行く所は暗きたはれめの家

○

漸くに一月振につぼみたる思ひを吾は咲かさじとする

○

ならしたき笛をわれもつ然れどもならせば胸の痛みくる笛

○

わが胸の恋の泉のありかをば少しく早く知り過ぎしかな

○

古くして黴の生えたる思想をば捨てぬに等し抱かずあるは

○

軽業の如くあやふき事もしぬ美しき眠が見てありし故

○

事多くくはだてて出し吾なりき其の初まりの恋にやぶれぬ

○
何等かのかかはりありてよかるべし彼の女と恋はなし得ざれども

○
快きその下駄の普をさまたぐる共の俗曲は唄ふな少女

○
美しき少女といへど空気より誠に少し際立てるのみ

○
少女らはあやまたずして尺の如吾の背丈をはかるにかあらむ

○
四つ角にはたとまろびて吾とわがあやふしと云ひ引返す吾

○
わが胸にみちて重たき思ひをばきく人もなし惜しけれど寝む

○
尊徳の伝記本など読み居ればさびしくなるを泣きたくなるを

○
わが顔の浮べるのみに其の辺の空気はすこしよごされて見ゆ

○
石などを投げつけられし犬の如泣きつつ走り路を曲れり

○
吾一人人よりあとに出で行きて人より先にかへり来る道

○
灰色の吾が帯の上にたれ下る羽職の紐をながめつつ行く

○
女なる未の子が泣く世の中はわがものの如いつまでも泣く

○
浦島が箱を開きて驚きし時の如くにおのれをば知る

○
ましぐらにかの都より古国の山の谷間へわが墜ちし音

○
だまされて身をば売りたる下町の娘の如く働きぬ吾

○
酒を飲むわかき不抱かあはれにも遠からず死ぬ老いし不抱か

○
独り寝の床のあたりをさまよふは死のあしおとか恋のといきか

○
泣顔がもの二つ三つ思ふまに老顔となり死顔となる

○
妻もあり子の四五人ももたむ時初めて嘆け吾は嘆くな

○
笑ひつつ口笛吹きて遊べるに彼人はきて今を温くかな

○
あはれなる吾の涙は暗き室の隅にて流れ手もてぬぬぐはる

○
四十路びとわが先生も口にせぬ悲しき事を吾早も言ふ

○
やつれたる火につまづきてかはらざる母の情にむせぶ頃かな

○
母人が更にあやふき顔をして吾を見たまふ故に又泣く

○
そのむかし嘉永の年に生れたる父をば我はたよりとぞする

○
つばくらの如く空をばかすめ
むか晴蛤の如く水に落ちむか

○
人とぬる夜のなきごと洒の夜
の最早なきごと消え入りて泣
く

○
日光よ先づあをざめし顔を焼
け黒奴のごと吾をならしめ

○
羨むも自らのためあきらめて
羨まざるも自らのため

○
いのちをばたのしむべきも知
らずして寂しき人となりはて
しかな

○
やくざなる兄をば思ふかなし
みの重みに堪へて死にしいも
うと

○
妹は母よと呼びていまはにも
兄よと呼ばで息たえしかな

○
妹を泣きたる鴉檐きてまた明
日死なん吾が上を泣く

○
いかにせん此の心もちわたく
しに孕む子のごと重くやどれ
る

○
君を抱く泣きし昨日のなきが
ごと行きづまりたる明日のな
きごと

○
美くしく生きがたきかなつま
づくは吾のむくろか父のむく
ろ

○
うつむきてものを案ずる父を
避け明るき町に出でてこしか

な

○
大空のやや面白なれる如動き
そめたる灰色の雲

○
世の中を嫌ふほどには世を知
らずこの己をば唯に嫌ひぬ

○
美くしく生きんとしたるなれ
のはて死にたくなきにぴすと
るを執る

○
冬の日も水に浸れる紙漉か寒
き命のなかに泣くわれ

○
族籠屋に着けるが如く下宿屋
に寝起する如わが家にある

○
荒浪に船のただよふ苦しみを
恋にてぞせし家にてぞせし

○
羨むも自らのためあきらめて
羨まざるも自らのため

○
いのちをばたのしむべきも知
らずして寂しき人となりはて
しかな

○
やくざなる兄をば思ふかなし
みの重みに堪へて死にしいも
うと

○
妹は母よと呼びていまはにも
兄よと呼ばで息たえしかな

○
妹を泣きたる鴉檐きてまた明
日死なん吾が上を泣く

○
いかにせん此の心もちわたく
しに孕む子のごと重くやどれ
る

○
君を抱く泣きし昨日のなきが
ごと行きづまりたる明日のな
きごと

○
美くしく生きがたきかなつま

づくは吾のむくろか父のむくろ

○ うつむきてものを案ずる父を避け明るき町に出ててこしかな

○ 大空のやや面白なれる如動きそめたる灰色の雲

○ 世の中を嫌ふほどには世を知らずこの己をば唯に嫌ひぬ

○ 美くしく生きんとしたるなれのはて死にたくなきにぴすとるを執る

○ 冬の日も水に浸れる紙漉か寒き命のなかに泣くわれ

○ 族籠屋に着けるが如く下宿屋に寝起する如わが家にある

○ 荒浪に船のただよふ苦しみを恋にてぞせし家にてぞせし

○ いたづらに大なるのみのかの海も小し役立つ溺れ死になば

○ いと善くは一人息子の役立ちし例きかねばうら安きかな

○ いもうとと喜ぶ暇も無かりけむ悲む暇もまた無かりけむ

○ 苦しさに顔をそむけてありし時わが殊に死なれたるかな

○ いもうとも琴をば彈かでいたましき物思をば父故にせし

○ 餘命をばなすこと無くて送るごと早くも我の世に倦みしかな

○ 腹立ちて泣言をする朝寝する父をたよりに生くるはかなさ

○ 酒の夜のできごころをば悉く身に行ひしなれの果きぬ

○ さいはひを世の人並に祈るとき悪運すでに降りかかりける

○ 心より死なんとすれど死にかねて可笑しき真似となりにけるかな

○ 生れたる事をまことに恨む時この若さにて殺さるる時

○ ふたおやが身も世もあらず欺く時欺かであるを子の道と知る

○ 口わろく罵り合へどたよりなく父も咳する我も咳する

○ 出で行きていと面白くばくち打つ父の留守をばしたる愚かさ

○ 暇をは親よりもまた出されしが傷つける身は猶家にある

○ 母死にて我の泣く日かわが死にて母の泣く日か涙あふるる

○ 日に三度ただ物を食ふ唇となりはてしかな赤き磨

○ 右の手に末期の水を湛へたる硝杯をもちて昇りし梯子

○ 百日の後に脚気は癒えたれど
さて世の中になす事のなき

○ あきらかに我の行手に横たはる父の亡きがら我の亡きがら

○ たのもしき物思より別れきて
逆境に立つ死の際に立つ

○ おのれのみ傷つきて立つ美くしき大空のもと大海の前

○ 思ひわぴひと夜寢ざれば著く
痩をあらはす悲しき命

○ かの君にこの我にては近寄れ
ずさびしく人を羨みぞする

○ 世の常の事と思ひてあきらめ
し独寢なれど寒き二月

○ 通ひきて闇夜に昇る梯子段真
昼の如し降るが如し

○ だきしめのあまき名残も香れ
るにまた面白き博ぞ始まる